

# 東京本田講に関する一考察

西村 敏也

はじめに

- 一 三峰神社・宝登山神社と東京本田講
  - 二 資料からみる本田講のあゆみ
  - 三 現在の登拝と講元の活動
- おわりに

## はじめに

東京本田講は、東京都葛飾区の地域に展開する三峰神社（埼玉県秩父市）、宝登山神社（埼玉県秩父郡長瀨町）へ登拝する講である。<sup>①</sup>明治後期に、地元在住の坂田眞十郎氏が三峰講として開講した。その後、昭和三年（一九二八）から宝登山神社への登拝も始まった。宝登山神社境内には、登拝を記念した「登拝記念碑」（昭和四七年（一九七二）も建立されている。東京本田講は、最盛期には一〇〇〇人を超える登拝者がおり、数々ある三峰講、宝登山講の中でも、かなり規模が大きく有力な講であった。ちなみに、東京本田講は、宝登山神社で有名講として分類している講である。有名講とは、五人講（五人一組で組織して、毎年一人が代参する形式の講）もしくは総参講（五人講の中で、代参形式でなく全員で登拝する形式の講）で、総人数がおおよそ三〇人以上の講で特

別に名前を付けた講のことを言う。<sup>②</sup>その中でも最大規模の講が、東京本田講なのである。

さて、東京本田講のように、昭和前期から昭和四〇年代（一九六五）にかけて、三峰神社登拝の帰山時、宝登山神社へ立ち寄り参拝する講、すなわち三峰講に宝登山講の機能を付加した講の事例が見られるようになる。東京、埼玉、群馬方面からの三峰神社登拝は、鉄道、バスいずれにせよ、ほぼ長瀨を通過していた。宝登山神社は、そこに注目しこれらの講に途中下車してもらい、登拝を促し講の拡張を図ったのであり、東京本田講もその一つであった。拙稿「宝登山のオイヌサマ信仰と宝登山講」<sup>③</sup>では、そのような事例の一つとして東京本田講に関して記述した。本稿は、拙文中で記述できなかった部分を含めて、再構成してまとめることとする。聞き取りで得られた情報と宝登山神社で記録された資料「東京本田講記録」（平成十一年（一九九九）に、東京本田講の講元のものとへ、宝登山神社からその写しを送られた。「東京本田講記録」の資料標題は筆者が名付けたものである。本稿中ではその名称を利用したい。詳細に関しては第二章参照）をもとに、東京本田講の歴史など、その全体に関して論じたい。本稿は、東京本田講という一つの講の事例を詳細に記述しているに過ぎない。しかし、そのことは東京本田講のことを明かにしていることに留まらず、他の三峰講、宝登山講の登拝パターンなどを知る手がかりになると考えたい。また、記述に際して、時間の経過

とともに東京本田講そのものはもちろん、講を取り巻く状況も変化していく様子にも注意したい。また、巨大な講を受け入れられる宝登山神社、そして長瀬の人々の対応にも目配りしたいと考える。

## 一 三峰神社・宝登山神社と東京本田講

### 1. 三峰神社と宝登山神社

それでは、東京本田講のことに触れる前に、まず三峰神社と三峰講、そして、宝登山神社と宝登山講に関して説明しておきたい。<sup>5)</sup>三峰神社は、埼玉県秩父市に鎮座しているが、近世までは神仏習合神である三峰権現を別当寺である観音

院が奉斎し、管理する体制にあった(写真1)。近代の神仏分離の影響により、観音院は廃寺となり、その後は神道一途の三峰神社となり現在に至る。そして、近世以来、現在まで登拝を続ける信仰団体が三峰講である。一方、宝登山神社は埼玉原秩父郡長瀬町に鎮座し、近世までは、神仏習合神である宝登山権現を、別当寺玉泉寺が奉斎、管理



(写真1) 三峰神社(隨身門)

(写真2) 宝登山神社(拝殿)



していた(写真2)。近代になり、神仏分離以後廃仏毀釈が吹き荒れたものの、玉泉寺は廃寺とならず、その後も残されることとなったが、中心は宝登山神社に移った。そして、この宝登山神社へ登拝する信仰集団が宝登山講である。両者とも信仰対象とする山岳である三峰山、宝登山の神の眷属神を、オイヌサマと措定しているが、このオイヌサマの御利益を信じてオイヌサマのお札、すなわち御眷属札を請けるために各講が組織化されたのである。いわゆるオイヌサマ信仰の講組織ということになる。<sup>6)</sup>ちなみに、その御利益は、主に都市部では火防・盗賊除けや商売繁盛、農村部では五穀豊穰などである。ただし、社会変化に応じて、現在では農村部でも主たる御利益は火防・盗賊除けとなっている。

### 2. 東京本田講概略

次に、東京本田講の概略を述べることにする。以下、原則的に東部講元瀧澤一郎氏からお伺いたお話から構成したい。<sup>7)</sup>東京本田講の登拝時期は毎年六月であり、これは講を始めた時以来変わっていない。講員は、毎年募集しているが、そ

れは、一つには登拝を続けていると、必ず高齢、病気のため参加出来なくなる人がいる。毎年新しい人に声をかけることによって、講員数の維持、増加をおこなうことができ、講の発展を促すからである。ただし、世話人の努力が相当必要になることも確かである。<sup>(8)</sup>

東京本田講のメインとなる行事は登拝であるが、その詳細は次章以降に譲るとして、ここでは、その他活動をpushしておきたい。まず、神社による講社巡回である。三峰山神社の東京本田講担当神職は、逸見房雄氏であり、年末の一月二〇日前後、挨拶に訪れる。その際、三峰神社で毎年作成する記念品を持参する。例えば、手帳、トートバッグ、懐中電灯などである。この講社訪問は昔からの習慣であり、逸見氏の前任は野上氏であった。

また、神社では、講の役員が亡くなった時は、葬儀にも参列する。たとえば、昭和五八年（一九八三）、本部の先達を勤めていた神職春日秀郎氏死去の際には、宝登山神社では、弔電を打ち告別式に花輪、香典を出したことに留まらず、松本権祐宜が葬儀に参列している。<sup>(9)</sup> 講社訪問の他、このような形でも、神社と講間でフェイス・トゥ・フェイスの密度の高いコミュニケーションが図られてきたのであり、その上に登拝という大イベントが繰り返しおこなわれ続けたのである。

次に、三峰神社から拝借してきた御眷属を納める祠に関して、触れておきたい（写真3）。講全体を守護する御眷属を納める講の祠は、現在講元瀧澤一郎氏の敷地にある。祠は大正時代頃からのものであり、八〇年以上経っているという。二、三年前に、修理した。材質は、御影石で出来ている。かつて、現在と別の場所に祀られていたが、瀧澤家がその土地を売却したので、現在の会社兼自宅の敷地内に移動した。毎月一日に

は、供物・水・酒を上げ、お祀りしている。立石地区の鎮守である立石熊野神社の宮司には、正月・五月・九月に来てもらい、安全祈願をしてもらっている。祠の前で祭典を執り行うが、同時に会社とその商売の繁栄祈願をしてもらっている。六月の登拝前には、祠から御眷属を取り出して登拝当日、三峰神社へ持参する。<sup>(10)</sup> 新しい御眷属を請けて帰って来ると、翌々日頃、祠へ納める。

続いて、講の組織の変遷と講元の変遷をみておきたい。当初一つの講として活動を続けてきたが、世話人の努力もあって一度に一〇〇〇人の講員が集まるようになった。そのため、一度に三峰神社へ宿泊できなくなったこと、なおかつ仮に無理に大勢を宿泊させた場合、消防法に抵触するため、昭和三五年（一九六〇）から、本部（講元坂田直吉氏）と東部（講元瀧澤一郎兵衛氏）の二つに分け、別日に登拝するようになった。



(写真3) 東京本田講の祠

本部は、主に四つ木の地域、東部は立石・松戸・金町、それぞれの在住者をカバーしている。現在は、世話人が住んでいる地域という意味あい  
で、世話人は地域を越えて講員を募集するので、講員の居住地は様々に  
なっている。最盛期、本部は三〇〇人、東部は八〇〇人の講員で登拝を  
おこなっていた。

次に講元についてである。初代講元は坂田眞十郎氏である。その後、  
二代目講元は加藤徳治郎氏、三代目講元は坂田氏息子坂田直吉氏、四代  
目講元は吉野博之氏、五代目講元は坂田登貴子氏と続く。その後、昭和  
三五年以後本部、東部に組織が分かると、東部では、坂田眞十郎氏娘  
で、坂田直吉氏の姉よね氏の夫である瀧澤利兵衛氏の子一郎兵衛氏が初  
代講元になった。その子一郎氏が、東部二代目講元である。

東京本田講は、登拝時の受け入れ先である長瀨の人々の間で、特別な  
思いで見られていた。長瀨を訪れる講の中で、最盛期一〇〇〇人以上に  
なった最大規模の講であったが、長瀨では梅講などと呼んでいた。その  
理由は、梅の時期に来るからとも、梅の時期に登拝しては大量の梅を購  
入していくからとも言われる<sup>11)</sup>。現在の東部講元の瀧澤一郎氏が経営する  
会社「東京和晒」は、昭和三〇年代（一九五五）、山形県の寒江や村  
山の地域から多くの集団就職者を受け入れていた。当時は三〇人ほど雇  
い、寮も保有していた。長瀨の人が梅講と認識する理由に呼応するよう  
に、確かに登拝する六月は丁度梅の収穫時期であり、秩父の梅は安価で  
あることから講の登拝時に大量に購入していた。梅干しにして、寮の食  
事に出したり、梅酒にして社員に出したりしたという。もちろん、他の  
講員も多くの梅を購入したという。現在は、梅干しは既製品で購入して  
しまうので、登拝時にそれほど多く購入しなくなった。長瀨の人々は、

この講が帰るとそれまで忙しかった講の登拝が一旦落ち着く、すなわち  
比較的楽な時期になったということを感じさせてくれる風物詩として捉  
えていた。大変、印象深い講だったのである。

## 二 資料からみる本田講のあゆみ

### 1. 表に関して

本章では、宝登山神社で記録してきた資料「東京本田講記録」<sup>12)</sup>をもと  
に、東京本田講のあゆみをたどってみたい。本章で利用する資料「東京  
本田講記録」は、東部講元の瀧澤一郎氏が、宝登山神社へ同講の登拝記  
録の照会をしたところ、平成一一年（一九九九）六月に宝登山神社から  
送られてきた資料（写し）である。よって原本は、宝登山神社で管理さ  
れている。資料は、神社側が毎年の東京宝登山講の登拝を記録したもの  
で、昭和三年（一九二八）から平成一一年までの記録の写しである。瀧  
澤氏のご厚意で、この資料を閲覧する機会に恵まれた。

さて、この資料を整理し作成したのが、（表1）（表2）（表3）「東京  
本田講記録」から、である。表中の項目は、登拝実施年度、参加形態  
（合同・本部・東部）、講全体の参加者数、宝登山神社で直会（中食のこ  
と。以後直会に統一）をとった数、宝登山で祈禱を受けた数、登拝交通  
手段、登拝日、備考である。宝登山神社登拝が始まった当時、講全体の  
参加者数はほとんど記録されていなかった。記録されているのは昭和八  
年（一九三三）、九年（一九三四）のみである。当初は、直会<sup>13)</sup>は、登拝  
参加者全体の一割程度が受けたことが想定される。その後、時代が下る  
につれ、直会を受ける人数も増加していく。そして、昭和三〇年（一九  
五五）年頃から、参加者全体が祈禱、直会を受ける時代を迎える。ま



(表1) 東京本田講記録から (一講)

登拝年度	参加形態	講参加 全体数	宝登山 登拝者数 (直会・中食)	祈祷者 数	登拝交通 手段	宝登山 登拝日	備考
昭和3年	一講		70		鉄道	6月20日	宝登山神社初登拝、講元坂田眞十郎
昭和4年	一講		71		鉄道	6月20日	
昭和5年	一講		75		鉄道	6月20日	
昭和6年	一講		77		鉄道	6月20日	
昭和7年	一講		78		鉄道	6月20日	
昭和8年	一講	890	89		鉄道	6月19日	
昭和9年	一講	780	79		鉄道	6月20日	
昭和10年	一講		87		遊覧自動車 (バス)	6月20日	バス4台。講元乗車の車がパンク。間に 合わず副講元立会で祭事挙行
昭和11年	一講		76		鉄道	6月20日	
昭和12年	一講		113		鉄道	6月20日	
昭和13年	一講		118		鉄道	6月20日	
昭和14年	一講						当年記録無し
昭和15年	一講		250		鉄道	6月20日	同日、秩父町東講、羽生講社に登山あり
昭和16年	一講		268		鉄道	6月20日	
昭和17年	一講		292		鉄道	6月20日	講元加藤徳治郎交代
昭和18年	一講		100		鉄道	6月20日	
昭和19年	一講						当年記録無し
昭和20年	一講						当年記録無し
昭和21年	一講		120		鉄道	6月20日	
昭和22年	一講						当年記録無し
昭和23年	一講						当年記録無し
昭和24年	一講		無し		鉄道・バス	6月20日	宝登山神社中食なし。中食は見晴亭にて
昭和25年	一講		253		鉄道・バス	6月20日	
昭和26年	一講		367		鉄道・バス	6月20日	神札記念品授与所設置
昭和27年	一講		384		鉄道・バス	6月20日	
昭和28年	一講		438		鉄道・バス	6月20日	1枚綴りの券(乗車券・食事券・中食 券・祈祷申込券)が利用される
昭和29年	一講		596		鉄道・バス	6月21日	鉄道組200名で21日。バス組25名で21 日。バス8台
昭和30年	一講	430	150		鉄道・バス	6月29・20日	バス組19日。鉄道組20日登山。バス9台
昭和31年	一講	418	182		鉄道・バス	6月20・26日	バス組6月20日、鉄道組6月26日登山。 バス8台
昭和32年	一講	390	233		鉄道・バス	6月20日	バス組20日、鉄道組21日登山
昭和33年	一講	543	198		鉄道・バス	6月20日	鉄道・バスともに20日、バスの祈祷は 523。バス10台
昭和34年	一講	575	312		鉄道・バス	6月21・22日	鉄道組21日、バス組22日登山

(表2) 東京本田講記録から (本部)

登拝年度	参加形態	講参加 全体数	宝登山 登拝者数 (直会・中食)	祈祷者 数	登拝交通 手段	宝登山 登拝日	備考
昭和35年	本部		271		鉄道・バス	6月20日	
昭和36年	本部		244		鉄道・バス	6月20日	甲組がバス、乙組が鉄道
昭和37年	本部						記録無し
昭和38年	本部		207		鉄道・バス	6月24日	バス2台。玉泉間(207名)・記念館(87名)
昭和39年	本部		377		鉄道・バス	6月22日	バス3台
昭和40年	本部	318	318		鉄道・バス	6月21日	バス2台
昭和41年	本部	327	327		鉄道・バス	6月20日	バス3台
昭和42年	本部	412	412		バス	6月20日	バス8台
昭和43年	本部	336	336		バス	6月17日	バス8台・東本田講の参拝形式
昭和44年	本部	346	346		バス	6月23日	バス8台

昭和45年	本部	403	403		バス(?)	6月22日	
昭和46年	本部	464	464		バス	6月21日	バス9台
昭和47年	本部	463	463		バス	6月19日	バス10台
昭和48年	本部	424	424		バス	6月18日	バス10台
昭和49年	本部	—	403		バス	6月17日	バス9台
昭和50年	本部	472	472		バス	6月23日	バス11台
昭和51年	本部	426	426		バス	6月21日 8月18日	バス10台
昭和52年	本部	390	390		バス	6月20日	バス10台
昭和53年	本部	—	375		バス	6月19日	バス10台
昭和54年	本部	407	407		バス	6月25日	バス9台
昭和55年	本部	—	176	322	バス	6月23日	バス7台。バス3台分は「宝登山亭」「若松屋」で昼食。人員確認せず不手際
昭和56年	本部	323	121	323	バス	6月22日	バス把握できていない。記事、東京豊三講と一緒に賑わいはある。来年参集殿が出来るので神社利用の講員増すと展望記す
昭和57年	本部	252	104	252	バス	6月21日	バス7台(全体)。神社、長瀬食堂4軒に分散して昼食
昭和58年	本部	259	178	259	バス	6月20日	バス6台。うち4台が神社で直会
昭和59年	本部	308	171	308	バス	6月18日	バス7台。うち4台が神社で直会
昭和60年	本部	333	161	333	バス	6月17日	バス8台。うち4台が神社で直会
昭和61年	本部	251	131	251	バス	6月23日	バス7台。うち4台が神社で直会
昭和62年	本部	256	129	256	バス	6月22日	バス6台。うち3台が神社で直会
昭和63年	本部	—	108	267	バス	6月20日	バス7台。うち3台が神社で直会
平成元年	本部	—	107	272	バス	6月19日	バス7台。うち3台が神社で直会
平成2年	本部	256	119	256	バス	6月18日	バス7台。吉野講元体調優れず参加せず
平成3年	本部	228	48	228	バス	6月17日	「若松屋」バス2台。「宝登山亭」バス2台。神社1台。合計5台
平成4年	本部	215	100	215	バス	6月22日	バス5台。新講元坂田登喜子
平成5年	本部	187	80	44	バス	6月21日	バス6台。祈祷者減っている
平成6年	本部	188	101	31	バス	6月20日	バス5台
平成7年	本部	—	99	32	バス	6月19日	バス4台
平成8年	本部	—	118	33	バス	6月17日	バス4台
平成9年	本部	—	93	26	バス	6月16日	バス3台
平成10年	本部	149	100	29	バス	6月22日	バス4台

(表3) 東京本田講記録から(東部)

登拝年度	参加形態	講参加全体数	宝登山登拝者数(直会・中食)	祈祷者数	登拝交通手段	宝登山登拝日	備考
昭和35年	東部	492	492		バス	6月19日	
昭和36年	東部	541	521		バス	6月19日	
昭和37年	東部	547	547		バス	6月17日	
昭和38年	東部	669	669		バス	6月23日	
昭和39年	東部	708	708		バス	6月21日	
昭和40年	東部	683	662		バス	6月20日	バス13台(三ツ矢観光バス)。乗務員28人直会。この年から詳細な書類
昭和41年	東部	691	691		バス	6月19日	バス14台。乗務員28人中食(直会から中食の記載へ)
昭和42年	東部	800	800		バス	6月18日	バス15台。乗務員28人中食
昭和43年	東部	669	669		バス	6月16日	バス13台(三ツ矢観光バス)
昭和44年	東部	813	813		バス	6月22日	バス16台
昭和45年	東部	754	754		バス	6月21日	バス15台(内山観光バス)
昭和46年	東部	776	776		バス	6月20日	バス16台。乗務員30人中食
昭和47年	東部	782	782		バス	6月18日	バス16台(内山観光バス)。乗務員19人直会

昭和48年	東部	785	785		バス	6月17日	バス15台。乗務員24人中食。大橋班のみ6月15日参拝（19名）
昭和49年	東部	602	602		バス	6月16日	バス12台
昭和50年	東部	695	695		バス	6月22日	バス14台。乗務員30人中食
昭和51年	東部	688	688		バス	6月20日	バス14台。乗務員29人中食
昭和52年	東部	681	681		バス	6月19日	バス15台。乗務員31人中食
昭和53年	東部		284	123	バス	6月18日	バス13台。乗務員12人中食
昭和54年	東部	683	301	99	バス	6月24日	バス13台。乗務員14人中食。本部5人
昭和55年	東部	773	340	89	バス	6月22日	バス16台
昭和56年	東部	714	298	77	バス	6月21日	バス16台
昭和57年	東部	406	164	48	バス	6月20日	バス13台
昭和58年	東部		229	55	バス	6月19日	バス10台
昭和59年	東部	520	262	50	バス	6月17日	バス11台
昭和60年	東部	352	151	40	バス	6月16日	バス9台
昭和61年	東部	385	182	101	バス	6月22日	バス9台
昭和62年	東部	360	178	50	バス	6月21日	バス11台
昭和63年	東部						当年記録無し
平成元年	東部	—	141	30	バス	6月18日	バス9台
平成2年	東部	—	157	25	バス	6月17日	バス5台
平成3年	東部	330	191	24	バス	6月16日	バス8台
平成4年	東部	291	156	16	バス	6月21日	バス7台。講元瀧澤一郎氏
平成5年	東部	288	152	20	バス	6月20日	バス7台
平成6年	東部	254	124	18	バス	6月19日	バス6台
平成7年	東部	243	132	14	バス	6月18日	バス6台
平成8年	東部	259	136	15	バス	6月16日	バス6台
平成9年	東部	250	124	11	バス	6月22日	バス6台
平成10年	東部	182	100	8	バス	6月31日	バス6台

た、参加者増大のため、同時期、鉄道、バスの組は別日に登拝するようになった。そして、先ほど述べたように、昭和三五年（一九六五）からは、本部、東部という別組織としてスタートすることになった。

それまで、罫紙に記され、神社の書き手によって情報がまちまちになっていたものが、昭和四〇年（一九六五）から宝登山神社が作成した講専用の用紙に、登拝のデータが記録されるようになった。これにより、講全体の登拝者と、宝登山神社の登拝数が把握できるようになった。表の講全体の登拝者欄を後の時代のところを埋めることができたのは、専用用紙にその欄が設けられ宝登山神社で数を記録し出したお陰である<sup>14</sup>。

また、本部は昭和五五年（一九八〇）以降、祈禱を受けるものの、直会は受けない講員が増加していく。平成五年（一九九三）を境に、祈禱を受けるものの数が激減する。一方、東部では昭和五七年（一九八二）頃から講全体の参加者が減少して来る。その頃、直会を受けるが、祈禱を受けないという人の数が増加していく。講全体の参加者の半数が直会を受けるものの、祈禱を受ける人はわずかという状況になる。

ここまでをまとめてみると、当初は、講全体の参加者は、到着後長瀬で分散して食事をとっていたが、宝登山神社へ集中していったと考えられる。しかし、また、徐々に長瀬の食堂で食事を取るスタイルへ移行していったのである。しかし、昭和末から平成初期の頃には、全体の参加者が激減していくことになる。

## 2. 一講時代

ここからは、資料をもとに東京本田講の登拝のあゆみを詳細にみてい

きたい。まずは、二つの講に分かれる以前の、一講時代に関してである。最も古い記録は、昭和三年（一九二八）の「登拝記録 昭和三年」（西村が標題を付与した）である。『宝登山』<sup>15</sup>でも、この年より東京本田講は、宝登山神社へ立ち寄るようになったことが記されている。

（資料一）

一 南葛飾郡本田町本田講員ノ当神社ニ参拝セラレタルハ従来多数アリタルナランモ其本田講トシテトシテ三峰山参拝ノ帰途一同ニ当神社ヲ参拝セラレタルハ昭和三年六月二十日ヲ以テ最初トス（爾後年々一定期日ニ登山参拝セラレ中食賄ヲ（致）シ各講員ニ家内安全札ヲ授与シ来リタリ<sup>16</sup>）

資料一には、講としての参加ではないが、それ以前より講員が参拝していたようであり、昭和三年より、三峰神社の帰途に宝登山講として登拝するようになったことが記されている。昭和三年六月二〇日、のことであった。以後決まった日に参拝して直会をとり、家内安全札が授与されるようになった。最初の登拝時は、「人数70人、祈祷料1000円、坊入7000円、（茶）料500円、神酒料はなし<sup>17</sup>」であった。人数は、坊入り（直会・中食を神酒とともに受けること）の人数である。ちなみに、祈祷を受ける人と同数とみられる。金額は、総額であろう。この記録は、昭和七年（一九三二）の部分に、昭和三年から昭和七年まで七年間分が一緒に記されている。同記録には、南葛飾郡本田講の昭和七年の講の役員組織も記されている。ここで宝登山講の草創期の役員組織を、紹介しておきたい。筆頭には神官、春日秀郎氏（在地の先達と思われる

る）。講元、坂田眞十郎氏、福講元二名、浅岡美之吉氏、滝沢利兵衛氏、会計、鶴岡七之助氏、世話人が立石・梅田、原、川端、宝木塚、篠原、若宮、四ツ木、洪江に各地区数名ずつ記されている。都合三一名の役員がいる。

さて、昭和八年（一九三三）からは、その年毎に登拝記録がされるようになる。全体の参加者は、約八九〇名で、そのうち八九人が宝登山神社で直会を受けている。他の者は、長湊の食堂などに分散して食事をとっていたものと思われる。昭和九年（一九三四）も、七八〇名が全体参加者であり、うち七九人が直会を受けている。昭和三年から昭和七年までの記録には、講全体の登拝者数は記されていないが、ほぼこの程度の規模で三峰神社へ登拝していたものと考えられる。

昭和九年（一九三四）の記録には、一月二三日に、宝登山神社河原社掌が年賀のため講元坂田眞十郎氏を訪問している。宝登山神社による、東京本田講に対する講社巡回である。この後、同様の記述が散見されることになるのであり、その習慣が続いていたことが分かる。また、この年の記録には、講員への案内状が添付されている。やはり、その後、同じ形式の案内が、引き続き毎年作成されるようになっていく。案内から、世話人が、毎回講員の募集を精力的におこなっていた様子がうかがえる。<sup>18</sup>

さて、当初の交通手段は、上野駅から鉄道に乗車して登拝するのが当たり前だった。ところが、昭和一〇年（一九三五）には遊覧自動車（バス）での登拝の試みがなされる。六月一四日付けで、バスで訪れることが講元から宝登山神社へ伝えられることになったが、従来と状況があまりに違うため、宝登山神社の江原社掌は、詳細を聞くためであろうか、



講元の坂田氏宅を訪れるものの不在で、坂田氏の出先へ電話して状況を聞き出している。例年は、一日目に三峰神社へ向かう東京本田講員が乗る電車へ、長瀬から宝登山神社の祓宜が乗り込み、三峰口駅まで打ち合わせをしては引き返し、それを受けて翌日のための準備をするのが習慣となっていた。もしくは熊谷駅まで出向き、相談することもあった（昭和三四年（一九五九））。今回は、遊覧自動車に乗り込み、打ち合わせをして三峰口駅から鉄道で帰って来たようである。初めてのバスによる登拝は四台であったが、二〇日一一時三〇分、先発の二台が到着し、一二時一〇分頃続いて一台が到着。しかし、講元が乗車したバスはあいにくパンクしてしまい、祭事に間に合わなくなってしまった。そのため、副講元立会で一二時三〇分より祭典が執行され、その後直会を受けることになった。いつも歓迎の煙火を打ち上げているが、一台バスが遅れたため、その一台のため打ち上げが例年より数が増えたということも記録されている。ちなみに、この年の案内から、バスになったため、立ち寄るコースが大きく変わったことが分かる。

（資料2）

- 一、当ル六月十九日午前六時四ツ木西光寺前集合六時三十分出発  
東京・大宮水川神社・熊谷・吉見百穴・箭弓稲荷ヲ見物馬返シヨリ徒歩約二時間三峰神社坊一泊（奥ノ院参拝随意）<sup>19)</sup>

資料2はその案内の一部であるが、資料から鉄道の場合、上野駅から乗車すると、三峰口駅までどこにも寄らず向かったものだが、バスになったことから様々なところへ立ち寄った様子が分かる。大宮水川神社

（現さいたま市）、吉見百穴（現吉見町）、箭弓稲荷（現東松山市）などである。ちなみに、翌日、三峰神社から宝登山神社への移動中、秩父神社（現秩父市）へも立ち寄っている。登拝にかかる費用は、前年、九円三〇銭（往復汽車賃・宿泊料・往復自動車賃・中食・茶料一切・ゆかた〈揃〉・手拭い付き）であったが、当年は、八円一〇銭（往復自動車賃、宿泊料・中食・茶料一切）、揃の浴衣手拭い付きがない人は別途一円四〇銭がかかる。比較するに、一〇銭違いということではほぼ同額である。同料金で、様々な観光地へも立ち寄ることができ、東京で一旦バスに乗ってしまえば、目的地まで運んでくれ、大変便利になった様子うかがえる。ただ、山頂まで運んでくれる三峰自動車道路や三峰山ロープウェイがない時代のため、鉄道利用の時と同様、麓から長時間登山をしなければならず、現在とは違えば大変だった様子も想像できる。後に、バス登拝に完全シフトするが、その先駆けであったと言えよう。ただ、翌年はまた鉄道に戻ってしまったことから、記録されていないが、パンクのことも含め、いろいろ不都合があったことが想像できる。

さて、昭和十一年（一九三六）には、長瀬到着後宝登山神社でまず入浴、という記事が出てくる。それ以前から続いていたことが考えられるが、長瀬で疲れを癒している状況がうかがえる。また、長瀬駅近くの食堂菊屋へ荷物を預けて、宝登山神社へ登拝していることが記されている。駅からしばらく坂道を歩かねばならない宝登山神社への登拝を便利にする工夫と言えよう。昭和十二年（一九三七）には、直会を受ける人数が一二名という多数になり、宝登山神社の賄い方が人手不足で、不行届けが起きている。この後直会を受ける人数がますます増えていくので、その度に対策が講じられるようになってくる。

昭和十三年（一九三八）の登拝の案内には「本年は非常時局に付出征将士武運長久祈願の為左記期日を以て参拝致し度候<sup>20</sup>」との記述が見られるが、戦時という世相とその中を登拝している様子が分かる。昭和十四年（一九三九）には、三峰山ロープウェイが開業した。三峰神社の旧神領という神域に開業するということで、内務省神社局からなかなか許可が下りなかったことなど、計画から開業まで長い年月がかかっていた。それまでの登拝ルートは、三峰口駅で降車すると、路線バスに乗り換え「馬返し」という場所、すなわち馬がこれ以上登れないという麓の登り口まで移動し、そこから神社を目指して長時間登山するというものがあった。それ故、ロープウェイの開業は、登拝者にとって朗報であった。ただし、まだ小型（二人乗り）のもので、登拝者は麓の大輪駅で長時間待たされる状況があつて不便な面があつた。戦後の昭和三十九年（一九六四）に七一人乗りになり、問題点がだいぶクリアされることになった<sup>21</sup>。しかし、三峰山ロープウェイの開業は、登拝時間を革新的に短縮させたため、従来三峰山内で一泊お籠もりするという登拝パターンに変化をもたらした。すなわち、三峰神社の収入に変化を与えることになった。ロープウェイの乗員が増えるようにした昭和三十九年の二年後の昭和四十二年（一九六七）のことであるが、山頂まで三峰観光有料道路（後に三峰観光道路）が開通し、自動車、バスで山頂まで登れるようになった。三峰口駅で下車して乗車するバスが、山頂まで一気に運んでくれることになった。このことは、近世より大輪駅周辺が、登山拠点として門前町の様相を呈していたものを、圧迫し、なおかつ平成一九年（二〇〇七）にはロープウェイを廃止へ追い込むことにもなった。

昭和十六年（一九四一）、直会を受ける登拝者が二六〇人に増加。宝

登山神社では大いに困り、二回に別けて接待している。昭和十八年（一九四三）で戦前の登拝記録は途絶えることになったが、戦局がいよいよ悪化で中止されたものと考えられる。

昭和二十一年（一九四六）、戦後最初の登拝がおこなわれる。意外に早い、再開の印象である。昭和十六年から二十一年までの記録は、反故紙の裏側にやや乱雑に書かれ、それ以後と比較すると記録情報も少ないように見受けられる。戦時中と戦後直後故であろうか。昭和二十二年（一九四七）、二十三年（一九四八）の記録はなく、その後昭和二十四年（一九四九）になると、以前のような野紙に丁寧な記録されるようになる<sup>22</sup>。ちなみに、この年はバス、鉄道など、数班に分かれて登拝する様子が記されている。その後、しばらく電車班、バス班並行の体制になる。また、昭和二十四年は、直会は神社でされおらず、役員も来年は実施したい旨が記されている。翌昭和二十五年（一九五〇）には、神社で直会が復活している。また、巨大な講のため書類も多いからか、この年神社で東京本田講の印を作つて押印している。宝登山神社では、この年東京本田講へ奥社造営の寄附を集めているが、二〇五名から一七八九五円という多額な寄附も集まり、このようなことから東京本田講の特別さを垣間みることができ<sup>23</sup>。また、講で鉄道の団体割引がきくという話を聞いたように、登拝時に適用できるよう宝登山神社を通して秩父鉄道へ掛け合っている。この年は、人数を宝登山神社へ知らせる連絡のために電報も利用している。宝登山神社でも神札記念品授与所を神前に設営して、多く訪れる授与者対策を施しているのが分かる。初めて、食事などの整理券も登場している。多くの登拝者を取りさばく、手段がいろいろ講じられていたのが分かる事象である。

昭和二九年（一九五四）になると、いっそう人数が多くなったため、鉄道組は一九日・二〇日の日程で二〇日に宝登山神社へ。バス組は二〇日・二一日の日程で二二日に宝登山神社へ登拝している。昭和三〇年（一九五五）も一九日がバス組、二〇日が鉄道組とそれぞれ宝登山神社へ登拝するというように、日を別け登拝するのが慣例化されたようである。昭和三十一年（一九五六）、バス組は、バス九台で、バス会社も二社利用している。ちなみに、当年は、正丸峠のコースを望んだが、事故があったことを耳にして、熊谷、長瀬経由コースへ変更しているということも記録されている。また、同年には、宝登山神社で専用の記録用紙を用意し出していることも付記しておく。さて、登拝者の増加は、様々な面に影響を及ぼした。一日目、バスが一度にロープウェイ大輪駅に到着してしまうと、全員が乗車終わるまで三時間かかってしまうので、途中で中食をとるなどして時間差で到着する工夫がなされた。また、二日目、三峰神社から講員を下山させ、バス一台がいっぱいになる度に出発させるといふ工夫をした。このように三峰神社を時間差で出発して、同時に宝登山神社へ到着しないよう対処したのである。また、昭和三十三年（一九五五）に記録されているよう、バスが宝登山神社に到着する度に、随時神前で参拝を済ませて直会に移るといふ工夫もなされた。また、当年、講で講旗であるマネキを作り、六月五日には世話人瀧澤一郎兵衛氏が宝登山神社横田宮司へ手紙で、事前に神社へマネキを送るので登拝当日掲げて欲しいと希望を伝えている。大勢の講員の交通整理をする、目印になったことであろう。また「選挙活動の如く講員確（ママ）得に皆努力願っており<sup>24</sup>」という文言が記されており、世話人が講員を必死に集めている様子もひしひしと伝わってくる。この努力のお陰であろうか、

結局、鉄道組二三〇名、バス組は一〇台分、五四〇名もの講員を集めることに成功している。講員が多くなったのは、世話人の努力の賜であったことが分かる。

### 3. 本部

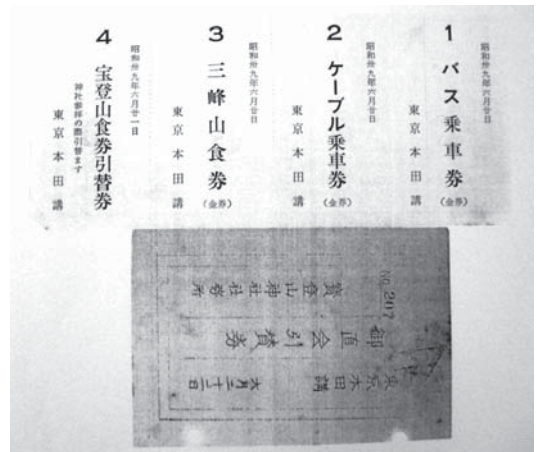
昭和三五年（一九六〇）になると、それまでの鉄道組は本部、バス組は東部に組織が分かれることになり、本部は一講時代の講元が引き継ぎ、東部は新たに講元が設けられることになった。昭和三八年（一九六三）、本部は、甲組、乙組二手に分かれて登拝しているが、甲組は、バスで熊谷を経由して出向き、乙組は正丸を経由する（西武秩父線利用）鉄道組であった。以前は、講員募集の段階では東部と同じ案内書を利用していたようだが、昭和四〇年（一九六五）になると、本部の案内書を作成している。まったくの別組織になっていることが分かる。昭和四三年（一九六八）には、バス八台で山上まで有料バイパスを利用して登拝している。昭和四四年（一九六九）は、人数が多いため、バス毎にまとまって登拝するのが難しく、めいめいが自由登拝になったことが記録されている。昭和四七年（一九七二）の記録に、本部の字が登場してくる。昭和四八年（一九七三）の段階では、本部という呼称と坂田講元班という呼称が併用されている。昭和四九年（一九七四）、「最大の講社参拝も終了出来、社内一同一致協力せし事に感謝したい<sup>25</sup>」と記録され、登拝者を取り仕切るのが大変で、それが終了して、ほっとしている様子がかがえよう。昭和五一年（一九七六）には、本部を吉野組と呼んでいることが記録されている。講元が吉野博之氏へ交代されたのである。

さて、昭和五五年（一九八〇）より本部は、半分ほどの講員が長瀬の

食堂で食事を取るようになったようである。平成二年（一九九〇）講元は参加せず、平成四年（一九九二）には、吉野氏から坂田登喜子氏へ講元の交代があり、坂田氏へ委嘱状が宝登山より出されると同時に前講元吉野博之氏へ感謝状が出されている。平成五年（一九九三）になると、登拝者が二桁台まで減少することになり、バスは四台になった。平成九年（一九九七）には、バス三台へ減少している。宝登山神社の記事「以前のような多数の登拝者なく一抹の淋しさを感じるが伝統を受継いで少人数ながらの登拝には感謝したい」<sup>(26)</sup>がその減少の様子をよく伝えている。

#### 4. 東部

昭和三五年（一九六〇）の記録には、バス組本田講と記されている。昭和三九年（一九六四）には、講では登拝に関する券（バス乗車券、ケーブル乗車券、三峰山食券、宝登山食券引替券〈御直会引替券と交換〉）を作成して、大勢の講員の取り扱いに利用している（写真4）。昭和四二年（一九六七）になって、初めて東部の名称が利用されている。昭和四三年（一九六八）には、綿密な登拝要項が宝登山神社で作成され、登拝の取り仕切りを利用された。この年の記録には、登拝に医師が同行していることも記されている。そして、全員が御祈禱を受けた証としての札はもうが、登拝形式は自由になったことが記録されている。昭和四七年（一九七二）には、宝登山神社の記念館が改造され、多人数の直会も楽に対応できるようになった。昭和五二年（一九七七）の記事には、「多数の講員と配車で幹部の心労はたいへんな事と思う」<sup>(27)</sup>と出てきており、宝登山神社から見ても、世話人が大変だった様子が分かる。当年、瀧澤一郎兵衛氏を講元として、六八一名の参加が認められた。し



(写真4) 三峰神社・宝登山神社の券

かし、翌昭和五三年（一九七八）には、二九三名へと激減する。その後、三〇〇人程度で推移していく。ちなみに、この年には、バス会社へ宝登山神社から感謝状も送られている。<sup>(28)</sup>昭和五七年（一九八二）、参加者四〇〇名、登拝者一六四名となり昨年より登拝者は少なくなったという記述が見られ、講の中でも講員の減少は、問題視されていたのがわかる。昭和五八年（一九八三）、宝登山神社へ着いたメンバーは、長瀬組と本社に分かれ、直会を受けたようである。平成四年（一九九二）には、瀧澤一郎兵衛氏が死去し、瀧澤一郎氏が講元を引き継いでいる。

#### 5. 瀧澤一郎氏の記憶

次に、ここで、資料から離れ、現講元瀧澤一郎氏の記憶、そして講の



中で伝えられている話から、昔の登拝の様子をうかがいたい。<sup>(29)</sup>資料から読み取ったことと重なる部分もあるが、記述することにした。

昔は、最盛期バス一〇台ほどで登拝していたというが、二代目講元時代から、旅行のプロである旅行代理店へ添乗員をお願いして対処したという。当時は現在のように携帯電話もなかったので、バス間の連絡も大変で、添乗員の人に取り仕切ってもらわざるを得なかった。最大時、東部は七〇〇人の講員が登拝していたが、長瀬でこれだけの人数を一度に受け入れることはほぼ不可能であったため、バスは時間差で三峰神社を出発するなどして対応した。また、あまりの人数の多さから、宝登山神社での祈祷札に全ての人の名前を記入できず、全員無記名で祈祷札を受けていたという。当初は、登拝者全員で宝登山神社客殿（玉泉寺本堂）で食事を取っていたが、対応が大変になり、その後長瀬の食堂に分散して、食事を取るようになった。以後、大勢の人が長瀬に分散して訪れたので、講が登拝するその日は長瀬の町は大いに賑わったという。また、あまりに人数が多いため、興雲閣の出来る前の古い三峰神社の宿坊では、一つの布団に二人で寝たり、観音院の旧本堂である小教院に泊まったという。大変であったが、今では楽しい思い出になっているという。

バス以前の交通手段は、鉄道であったが、池袋から東武東上線、上野から高崎線で向かう人などがいた。昼から坊に入る人、夜入る人など様々な人がいた。グループを組んで出かける人もいた。個人、グループ毎にめいめい三峰神社へ入ったという。その後、昭和三五年（一九六〇）頃、鉄道の他、自家用車で行く人も出て来た。

### 三 現在の登拝と講元の活動

#### 1. 講の性格

本章では、現在の登拝の様子を記してみたい。講創業時は、例外はあったものの原則毎年六月一九日、二〇日に登拝するのが慣例となっていた。現在は、社会状況に合わせて、本部は毎年六月の第三日曜日、東部は第三土曜日に登拝を続けている。<sup>(30)</sup>

現在、講の登拝は、観光、レジャー旅行の意味合いがかなり強くなっている。講では、毎年世話人が、つてを頼って講員を募集している。葛飾周辺の会社や店などでは、社員旅行を東京本田講の登拝で充てているケースもある。このように、講の登拝旅行の中には、様々な意味合いの参加者が含まれているのである。昔は、個人旅行は少なく、旅行と言えば、子供達の修学旅行や大人の社員旅行が定番であった。しかし、現在は、個人旅行が増加傾向にあり団体旅行は減少傾向にある。だが、講の登拝旅行は、旅行代理店の商品同様申し込み後はついて行くだけという、任せてしまえば楽で安全な団体旅行である。個人旅行者でありながら、団体旅行へ委ねるという状況が展開しているのである。<sup>(31)</sup>このように、講は団体旅行のかたちをとっているが、様々な個人旅行者を含む個の集合体のような性格の集団ともなっている。

登拝は、総参りのスタイルをとっており、毎年参加している人は三〜四割。残り七〜六割は、一度は参加したことがあるリピーターである。昭和三〇年（一九五五）頃には、七〇〇人ほど、現在は一〇〇〇人程度が参加している。リピーターが多いのにもかかわらず、毎年同じ場所へ出かけていく訳であり、その中でいかに参加者に喜んでもらい、なおかつ

翌年も参加してもらえるか、努力を続けている。例えば、毎年変わった場所へ寄り道をするなどの工夫である。長瀬ならば、長瀬町郷土資料館脇のお花畑見学、長瀬ライン下りなどもおこなった。一日目は時間に余裕がなく、長く立ち寄ることは厳しいが、二日目、三峰神社から宝登山神社までの道中は、時間が取りやすい。そのため、秩父札所に寄ったり、荒川町歴史民俗資料館（現秩父市立荒川歴史民俗資料館）に寄りたりしてきた。しかし、あまり大きくルートからはずれることもできないので、だんだん選択肢が少なくなってきたのも確かである。良い場所がないか、いろいろな人に相談している。今後も、工夫していきたいと思っ

さて、一方、本部の状況であるが、総参りは五年くらい前に終わったという。現在は数名で代参を続けている。札の交換が目的なのだから、時間・費用の節約になるため日帰りのほうが良いと考えているという。それに比べ、東部は、登拝を旅行として位置付けている。毎年同じ場所へ行くが、参加者からはゆっくり過ごせるため気分転換になっているという意見もあるという。メンバーも少しずつではあるが、毎年変わるの

で、いろいろな人と出会えるチャンスにもなっている。東部では、講演は訪れる場所だけでなく、神社内でも毎年違う試みをおこなうようにしているという。例えば、三峰神社で、宴会会場の座敷にテーブル、イスを入れてもらった。年配者には楽だったと、好評であった。早朝七時からの参拝にも、三〇脚ぐらいイスを入れてもらったが、そこから順に埋ま

どの日本の伝統的繊維精製品を製造する「東京和晒」の経営者である。父親の会社を引き継いだというが、滝澤氏の新種気鋭のスタイルは、インターネットの展開から消費者とダイレクトにつなぐ販路の開拓<sup>32</sup>などにあらわれている。その手腕は、東京本田講の講演の立場においても遺憾なく発揮されている。講の発展維持が、このような個人のリーダーシップに支えられているというのも事実なのである。

## 2. 登拝の流れ

それでは、次に登拝の流れを記したい。平成二五年（二〇一三）の登拝を事例として紹介したい。まず、二月第一週初午の日に三峰神社祇宜を招待し、講演、世話人十数名が集まり「新年役員会」を開催する。平成二五年は二月八日であった。「新年役員会」の通知は、前年の暮れに往復ハガキを出して知らせる。講演が自宅で作成して投函し、出席確認をとる。その際、三峰神社祇宜の逸見氏にも投函している。逸見氏は東京本田講の担当者であり、暮れには講演のところへ講社訪問に来てい

る。しかし、登拝の際に必ず三峰神社にいないとは限らないので、講演以外の役員達とゆっくり話ができる機会がない。そのため、新年会に参加していただき世話人と交流をはかっている。逸見氏は、毎年三峰神社で作成する記念品を、役員の数分、持参してくれている。大きなもので、当日持参するのが大変な場合は、予め宅配で講演宅へ送ってくる。「新年役員会」では、講演、逸見氏の挨拶、副講演による乾杯後、講演進行のもと、登拝の打ち合わせ、講の予算組み、世話人へ講員募集を促すことなどがおこなわれる<sup>33</sup>。

その後、しばらくすると講演は登拝のための案内（切り取り線以下申

込書)を三〇〇枚ほど印刷店へ注文する(写真5)。出来上がると世話人のところへ手土産ともども届ける。世話人は、案内を以て登拝募集を始める<sup>(34)</sup>。かつては、このように町会のつながりを手がかりに講員を募集していったのである。現在は、世話人の友人、職場へ声掛けする。そのため、地域を越えた遠隔地からの参加者もある。例えば、埼玉県川口市、千葉県松戸市などである。

六月の第一週に、「世話人会」を開催する。六月の世話人会の通知は、講元が約一ヶ月前の五月中にファックスで役員に送る。ファックスがない人には、往復ハガキで送り、出席確認をとる。「世話人会」では、世話人が募集して集めた申込書・費用を持ち寄り、登拝の最終確認をおこなう。登拝の三日前になると、講元は参加者名簿、興雲閣の宿泊の部屋割り表を三峰神社へファックスで送る。

次に、登拝当日に関してである。東部は六月第三土日に参拝する(本日は六月第三日目に登拝するのが慣例)。ちなみに平成二五年は、六月一五・一六日であった。バス三台ほどで出かける。午前七時、三ヶ所(葛飾区役所噴水前・本田公園・中川土手下雪風ガレージ前)から出発して、午後一時頃の到着を目指す<sup>(35)</sup>。

バスへの乗車方法で



(写真5) 案内

(写真6) 貼札注文袋と奉納袋



場に到着すると、山内の土産物店である大鳥屋、山籠亭のバスで神社まで向かい、宿坊の興雲閣に入る。途中、大鳥屋、山籠亭、吉田屋で昼食をとるが、予めバスごとによって立寄る店が決まっている。持ち込みができるので、持ってきた弁当で食事を取る人も多い。しかし、それ

ある。バスには、世話人とその世話人が募集してきた講員が乗車する<sup>(36)</sup>。世話人が募集して成立しているところがあるので、原則、講員の世話は、かなりの部分を世話人に任せる。飲み物等を積み込み、バス乗員へチップ、トイレ確認後、参加人数の最終報告(名簿提出)をおこない、済んだ車から順次出発する。講元は、取りまとめて三峰神社へ電話連絡する。バス内で、神社から送ってもらっている貼札注文袋を配り、札代のお金を入れてもらい世話人は集計する。また、奉納袋を配り、最低三〇〇〇円を入れてもらう(写真6)。バス内では飲食して過ごす講員、また家からおにぎり、弁当、お菓子などを持参して楽しむ講員もいる。

順路は、首都高速道路四つ木入口、外環自動車道路、関越自動車道、花園IC、秩父道の駅、三峰神社というコースである。三峰神社の駐車

は、店に申し訳ないので、講の中で申し合わせて、ビールなどの飲み物を注文したり、土産を買うよう、講員に促している。

興雲閣に到着すると、まず役員はフロント前へ集まり「到着後世話人会」をおこなう。そこに三峰神社職員も合流する。会計の精算、社務所へお札依頼、伴天渡し、宴会の商品やカラオケ出演者と役割分担の確認、帰りの観光、感謝状の確認、宮司への挨拶と記念撮影などの件に関して打ち合わせする。また、世話人ごとに、古い御眷属を持参しているので、三峰神社へそれを渡す<sup>37)</sup>。午後五時四〇分、世話人は一足早く集合して準備をする。午後六時より講員全体で食事を取り、お楽しみ会をおこなう。平成二五年はじゃんけん大会をおこなった。

その日は興雲閣に宿泊する。翌日早朝午前七時、「早朝祈願祭」に参加してご祈禱を受ける。その後、朝食を取るが、中には早朝、奥社参拝をする人もいるという。その後、午前九時頃、三峰神社を出発する<sup>38)</sup>。平成二五年は、小鹿野観光交流館、酒づくりの森に立ち寄り、その後長瀨へ向かった。

午前十一時頃長瀨に到着し、宝登山神社へ登拝する。その後、到着するとバスごとに決まっている場所、宝登山神社、長瀨の食堂で昼食をとる。平成二五年の場合は、一、三号車が宝登山神社で、二号車が、長瀨屋、若松であった。ご祈禱に関しては、受ける人も受けない人もいる。ちなみに、宝登山神社では、御眷属は請けない。その後、自由に散策するが、長瀨は一時間ぐらいの時間をとっている。宝登山神社で食事をとった人も、長瀨溪谷へ行き長瀨散策を楽しんだり、お土産を買ったりして過ごす。午後二時から三時には長瀨を出発し、往きと同じ順路で葛飾へ帰る。

さて、話をもとに戻すと、二日目、長瀨へ向かう前に、世話人は、宝登山神社、長瀨の食堂に人数の連絡を入れる<sup>39)</sup>。長瀨に到着すると、講員は宝登山神社で、まず支払いを済ませて、長瀨駅方面へ向かうバス（二号車）へ乗車して、二軒の食堂に料金を支払う。講員は宝登山神社を含めたすべての食堂に、料金を自らが支払うのである。ただ、長瀨の各地に分散している世話人に、引き揚げ時間などの設定を任せている。ちなみに宝登山神社や長瀨の食堂ともに、世話人が直接、契約している。帰りの渋滞を考えると、最低でも午後二時過ぎには出発したいところであり、店であまりばらつきが出ないよう六月の世話人会で事前に調整するよう心がけている。現在、一〇〇人ほどの参加者になったので、宝登山神社だけで昼食はまかなえるが、昔からのつきあいもあり、長瀨の食堂も利用し続けているという。

帰山二週間後、地元でオヒマチに相当する「ハチアライ」を世話人でおこなう。帰山後すぐ、講員がハチアライの招集をファックスでおこなう。平成二五年は、七月五日午後六時半から地元の料理屋でおこなった。

### おわりに

さて、今まで東京本田講に関して聞き取り、そして、「東京本田講記録」から、その歴史、概要、特に登拝時に関して眺めてきた。最後に、まとめと若干の私見を述べたい。

まず、交通手段に関してである。その変遷は、鉄道、バス、また鉄道に戻り、鉄道・バスの併用、バス単独という歴史をたどった。あまりの人数の多さから昭和三五年（一九六〇）から、本部・東部へ分かれて別日に登拝するということになった。ちなみに、分かれた後の本部登拝日



はまちまちであり、電車から途中バスに切り替わるなどした。

ちなみに、本部、東部ともにバスへ落ち着いていくが、三峰観光有料道路が出来たことがそれを後押しした。バスは途中いろいろな場所に立ち寄ることができるため、レジャーの要素の強い講の旅行には適している。

「東京本田講記録」からは、戦中・戦後の世相を垣間見ることが出来た。登拝の戦中の中断に対して意外に早く復活している。厳しい時代ではあるが、早く平時に戻りたいという気持ちの現れであろうか。戦後の復興という、視点からの考察もできよう。この点は、以後の課題としたい。

講の旅行は団体旅行であるが、様々な個人の旅行者を含む集団という性格を持っている。お互いを干渉しない集団ということが現在も講が続いている一つの理由ではなからうか。また、毎年の講員募集による補充の努力をおこなっているが、これはかなり大変である。参加者の主力はリピーターであるが、彼らが飽きないよう内容の工夫を怠らない。現在の講元瀧澤一郎氏は、特に奮闘している。瀧澤氏は自ら会社経営で培った経験を、講元としても利用している。講維持を、一人の資質に頼っている傾向が強いことが言えよう。講維持に関しては、もちろん、三峰神社、宝登山神社の努力も見逃せない。講社巡回、当日の接待はもちろん、宝登山神社に至っては、一日目に電車に乗り込み、打ち合わせをして人数の正確な把握をして、直会の準備を進めるなどの努力が見られる。また、最大一〇〇〇人いた講員は、長瀬の地域を経済的に潤してきたのも事実であった。ただ、現在、講員数が加速度的に減ってきているのは憂慮すべきことである。

また、当たり前だが、宝登山神社で記録していた「東京本田講記録」

からは、昭和三年以前、すなわち宝登山神社へ立ち寄るようになる前の、三峰神社単独登拝時代のことは分からない。東京本田講の全体像を描き出すためには、三峰神社の登拝の様子も明らかにせねばなるまい。資料発掘を含め、聞き取り調査を充実させて取り組んでいきたいと考えている。

最後に、今後、講がどのような方向へ向かって歩んでいくのか、筆者としても見守っていきたいと思う。

#### 註

- (1) 講元である瀧澤一郎氏への聞き取り調査を中心に構成した
- (2) 埼玉県秩父郡長瀬町宝登山神社々務所『宝登山―宝登山神社誌稿』一九七九年、一五八頁
- (3) 拙稿「宝登山のオイヌサマ信仰と宝登山講」(長谷部八朗編著『講』研究の可能性Ⅲ)慶友社、二〇一五年刊行予定)
- (4) 二〇一二―二〇一三年、筆者による瀧澤一郎氏、逸見房雄氏、千島幸明氏、中山高明氏、曾根原正宏氏への聞き取り調査
- (5) 拙著『武州三峰山の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇〇九年、埼玉県秩父郡長瀬町宝登山神社々務所『宝登山―宝登山神社誌稿』一九七九年、埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉県の神社入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁、一三二六―一三二一、一四〇四―一四〇九頁、参照
- (6) 秩父地方は、オイヌサマ信仰が根強く展開している地域である。秩父地方のオイヌサマ信仰に関しては、次の文献が詳しい。直良信夫『日本産狼の研究』校倉書房、一九六五年、平岩米吉『狼―その生態と歴史―』池田書店、一九七二年、野本寛一「山犬信仰の発生と展開」『焼畑民俗文化論』雄山閣、一九八四年、飯塚好「お犬さま信仰とその周辺―秩父地方を中心として―」(埼玉県立博物館紀要)一五、一九八九年)、牧野眞一「山犬信仰の諸相」(宮本袈裟雄編『民俗宗教の西日本と東日本における構造的相違に関する総合的調査研究』八平成三年度科学研究費補助金「総合研究A」研究成果報告書、一九九

- (二年)、拙稿「秩父地方に展開する狼信仰寺社とその由緒」(『動物観研究』一五、二〇一〇年)
- (7) 二〇一三年、筆者による瀧澤一郎氏への聞き取り調査
- (8) 「講社点描 東京本田講社」(『みつミ祢山』一六〇、一九九八年、七頁) 参照
- (9) 宝登山神社「東京本田講社」(宝登山神社蔵) 参照
- (10) その他、講員個人で御眷属請けをする講員は、登拝前に古い御眷属を講元のところへ届けている。瀧澤氏は、それを登拝の日まで、紙袋に入れて取りまとめおき、登拝時に三峰神社へ持参する
- (11) 二〇一三年、筆者による中山高明氏、曾根原正宏氏への聞き取り調査
- (12) 前掲「東京本田講社」
- (13) 当初は坊入と記されていた。直会は祭典の後におこなうのが通例であり、祈祷者数は記されていないものの、直会を受けたものと祈祷を受けたものは同数であると考えられる
- (14) 空欄に「―」と記したのは、記入用紙に講全体の登拝者用の空欄があるにも関わらず、宝登山神社で記入していないためである。しかし、直会を受ける人の数と祈祷を受ける人の数は、ほぼ同数と考えられる
- (15) 前掲「宝登山―宝登山神社誌稿―」一六六頁
- (16) 前掲「東京本田講社」
- (17) 前掲「東京本田講社」
- (18) 昭和十五年(一九四〇) 講元は病気で参加できず、息子が代わりに登山して病氣平癒祈願をしている(昭和一七年八月一九四三〇死亡、ちなみに昭和一七年(一九四二)には講元が加藤氏に交代している)
- (19) 前掲「東京本田講社」
- (20) 前掲「東京本田講社」
- (21) 前掲「宝登山」五四―五五頁、参照
- (22) 前掲「東京本田講社」
- (23) 昭和二十六年(一九五二)、三月には宝登山神社が、加藤講元、春日宮司、鶴岡会計を講社巡回する記事が出てくる。また、三月二三日には、神社へ役員を招待して打ち合わせをしている
- (24) 前掲「東京本田講社」
- (25) 前掲「東京本田講社」
- (26) 前掲「東京本田講社」
- (27) 前掲「東京本田講社」

- (28) 昭和五年(一九八〇)の登拝は、選挙のため早く切り上げられた
- (29) 二〇一三年、筆者による瀧澤一郎氏への聞き取り調査
- (30) 「講社点描 東京本田講社」(『みつミ祢山』一八四号、二〇〇四年、九頁) 参照
- (31) 参加する個人の中には、この地へ嫁に来た人が、遠くに住む実親を招待しているなどというケースも見られる。また、世話人との縁から、埼玉県川口市の人が参加するようになり、現在まで一〇年ほどの間参加しているという。様々な個人が参加しているのである
- (32) 「企業物語 東京和晒株式会社伝統的染色業の復活に懸ける男」(Bigfile21企業物語メディア) <http://bigfile21.com/companies/20937> (2014・12・1) 参照
- (33) 前掲「講社点描 東京本田講社」(『みつミ祢山』一六〇、七頁) 参照
- (34) 近くの整骨院は、お客さんなどへ声掛けして、いつも多くの人を集めてくれている。世話人の他、地域で協力してくれる人がいるのである
- (35) バスで出かけるようになってからも、瀧澤一郎講元は自動車で行っていたが、最近はバスに乗っていくという
- (36) 以前は、講員のグループの規模が大きい場合は、同じバスに乗り切れないということで参加を断っていたこともあるという
- (37) 瀧澤一郎氏も様々な人から受け取って持って行っている。講員で御眷属を請けている人は世話人の中で三人程度であり、全体的に非常に少ない。ちなみに、瀧澤氏は請けているという。その代わり、宝登山神社では、木札を請けるといふ
- (38) 三峰神社での宿泊に関する精算業務は、宿泊した翌日、帰山する時に講元がおこなう。
- (39) 長瀬の食堂は、現在長瀬亭と若松屋である。一五〇〇円の予算で店へらせているという
- 〔付記〕  
本稿作成にあたっては、瀧澤一郎氏、逸見房雄氏(三峰神社祢宜)、千島幸明氏(三峰神社祢宜)、中山高明氏(宝登山神社宮司)、曾根原正宏氏(宝登山神社祢宜)に大変お世話になった。この場を借りて改めてお礼申し上げたい。